

2020 年度事業計画

I. 2020 年度事業計画

ソニー教育財団は昨年、1959 年にスタートさせた教育助成事業が 60 周年を迎えました。当初から一貫して、「科学する心を育てる」、「科学が好きな子どもを育てる」を主題に、科学を通して、好奇心や創造力を伸ばし、勇気をもって挑戦していく子どもたちを育てることを理念として取り組んでまいりました。そして、その間、多くの行政、小・中学校や園の関係者の皆さまから、熱心なご支援やご協力を賜りながら、当財団の理念に賛同し、情熱をもって取り組まれる教員や保育者を支援し、子どもたちには学びの場を提供してまいりました。一方で、この 60 年を振り返りますと、昭和であった冒頭の 30 年間はこの事業の立ち上げ、普及期であり、続く平成の 30 年間は事業の質・量ともに拡大・充実期であったといえます。そして、令和の時代を迎え、社会や教育の在り方が大きく変わるとともに、教員・保育者の取り巻く環境も激変しています。こうした状況を踏まえ、今回の事業計画策定にあたっては、設立当初の理念を継承しつつも、あらためて、新しい時代に即した事業展開と助成の在り方について議論を始めています。

【公 1】 科学教育を中心とし、乳幼児および児童生徒の豊かな人間性の確立と創造性の育成を目指す事業

教育実践論文募集をベースとした本事業は、当財団の主幹事業であり、優れた教育実践の論文募集とその表彰をするだけでなく、優れた実践を他校・他園に紹介し、ともに研鑽していくことを目指しています。2020 年度も引き続き、論文募集においてはその量の確保と質の向上を目指しつつ、優れた実践の伝播波及についても、従来に増して注力してまいります。

1. 幼児教育

ソニー幼児教育支援プログラムは「科学する心を育てる」を主題として、保育の実践をまとめた論文を募集し、優れた取り組みを行う園に対し、助成するものです。優れた実践論文を表彰するに留めず、入選園による公開研究会・発表会や、毎年発行する「実践事例集」などの媒体を活用し、主題への理解を広く深めることで、多くの園の活性化や保育の質の確保と向上を目指しています。昨今、乳幼児保育について社会の関心が高まり、直近は 3 年連続で論文応募数が過去最高を更新していますが、今後さらなる拡大と質の向上を目指すには従来の財団主導による手法では限界があると思われます。全国の保育者が繋がり、ともに切磋琢磨することで発展していくという考え方のもと、財団と保育者個人をつなぐネットワークを構築、保育者主体による事業発展を支援する体制を整えてまいります。

(1) 教育実践論文の募集（ソニー幼児教育支援プログラム）

2019 年度の論文応募状況を見てみますと、応募数上位 10 都道府県で全体の 70% を占め、地域による応募数格差が鮮明な状況ですが、その中でも地域自主研究会開催地からの応募が多いことが特徴です。これは、「園の教育の質の向上を図り、外部による第三者評価がなされる本プログラムへの取り組みが有効」と考える園が増え、そうした地域では継続して自主的な研究会を実施、その参加者数も増えています。こうした実態を踏まえ、既に立ち上がった地域の活動は引き続き自主的運営を進めてもらいながら、応募実績の少ない地域での普及活動（研究会や発表会参加への勧誘と助成、論文説明会の開催など）に着手していきます。

(2) 科学する心を育てる保育の質の向上を目的とした「発表会・研究会」などの開催

①「最優秀園実践発表会」の開催

2020 年度も優れた保育実践の伝播波及を目的とした最優秀受賞園による研究発表会を開催いたします。近年、本発表会においては保育に対する関心の高まりとともに、参加者が毎回 200～300 人と増加傾向にあります。参加者が「科学する心を育てる保育」についての理解を深め、各園の保育の質向上に寄与する有益な会とすべく、開催園とともに作り上げてまいります。なお、日程につきましては、2020 年 6 月に「京都市立中京もえぎ幼稚園（京都府）」が、同年 7 月に「福島大学附属幼稚園（福島県）」が、それぞれ開催することが決定しています。

②「優秀園実践提案研究会」の開催

優秀賞受賞園の自主的な開催としている提案研究会も財団から後押ししながら、できる限り開催いただくように推進してまいります。2019年度優秀園 審査委員特別賞を受賞した「NPO 法人東村山子育て支援ネットワークすずめ つばさ保育園（東京都）」については、2021年2月に開催することが決まりました。また、それ以外の優秀園受賞園（10園）についても、とくに初受賞した園や、研究会が少ない地域にある園での開催を重点的に働きかけることで、開催園はもとより、近隣地域から参加される他園の保育者の資質向上に寄与できるようにしてまいります。また、内容の充実はもとより、保育者のみならず、周辺の小学校や各種教育機関への参加を働きかけ、最近ますます重要視されている、保幼小中連携を踏まえた活発な意見交換の場にもしたいと考えています。

③保育者ネットワークの構築

2017年度より、論文を応募された園の研究代表や保育者、各種研修会や研究会への参加者などを対象に、財団からの情報を提供することを目的に、月1回の頻度で、希望者への「メールマガジンの配信」を通じ、保育者のネットワークを築いてきました。加えて、各種研究会、発表会・研修会等を通して、園と当財団や園同士の繋がりが生まれ、少しずつ地域自主研究会が立ち上がってきています。一方で、職員の異動などにより、個人と当財団の繋がりが途切れてしまうことも散見され、課題となっています。そこで、保育者ネットワークを強固なものとするため、個人のネットワークから園へ、地域と地域が繋がりを広げていくことを目的とした、個人会員による「乳幼児のための科学する心ネットワーク（仮称）」を立ち上げ、会員を募ることにしました。このネットワークを通じ、地域での中核となる意欲ある人材の発掘にもつなげ、新たな地域での自主研究会を立ち上げることも視野に入れていきます。

（3）実践事例の紹介

優れた実践事例の伝播普及については、研究会・提案会のようなイベントだけではなく、様々な媒体を通じて発信していきます。財団ホームページでは、「保育のヒント」として応募論文より優れた実践事例を取り上げ、月1～2回程度の頻度で、紹介、掲載しています。これまでに紹介された事例は約900件（22項目に分類）を超えており、アクセス数も年々増加しています。本年度は特に、昨年度新設した優良賞を受賞した園の実践を中心に、主題に迫る保育の工夫をしている園の事例中心に公開していく予定です。また、刊行物としては、毎年好評いただいている「科学する心を育てる実践事例集（Vol.17）」も作成を進めており、最優秀園や優秀園の実践を詳細に公開したものを5月以降、各地の研究会などで幅広く配布していきます。さらに、2019年末に作成した「科学する心を育てる実践事例集特別号（60周年記念号）」については、過去10年における最優秀園の事例を再編したものを刊行いたしました。この刊行物も、実践事例集と同様に、研究会・発表会における場での配布や、「乳幼児のための科学する心ネットワーク」入会者へ贈呈するなど、「科学する心を育てる」保育の普及に繋げていきます。

（4）「科学する心を見つけよう」フォトコンテスト

保護者が子どもたちの「科学する心」をみせる表情に注目してもらおうとスタートしたフォトコンテストも、毎年200件を超える応募をいただき、すっかり定着してきました。2020年度も引き続き、募集活動を積極的に進めていきます。また、入選作の周知活動もすでに各地の科学館で写真展を行っていただいておりますが、新たな試みとして乳幼児を連れた保護者が多く利用する「子育て支援センター」にて掲示、開催いただけるようアプローチを開始します。

一方でこのコンテストの写真が保育の現場や教育の場でも活用できないかとの声もいただいております。財団の「幼児教育支援プログラム」との連携、協業についても検討してまいります。具体的には、保育者の各種研修会における教材として活用するなどのアイデアが挙がっています。

また、保護者向けのものでは、園からの要望が多い、「井深大の子育てメッセージ」が書かれた冊子「心をはぐくむ」についても、フォトコンテストの周知にあわせて、配布し、乳幼児期の過ごし方や保護者の関わりの大切さを伝える機会を増やしてまいります。

2. 子ども科学教育

「ソニー子ども科学教育プログラム」は主題を「科学が好きな子どもを育てる」とし、理科の教育実践と次年度計画に関する論文を募集し、優れた取り組みの学校に対して助成を行うものです。最優秀校は受賞の翌年に「子ども科学教育研究全国大会」を必ず開催し、全国の教育関係者にその取り組みを公開、ともに学ぶ場を提供しています。

(1) 教育実践論文の募集（ソニー子ども科学教育プログラム）

2019年度の論文応募数は前年とほぼ同等の171校（前年度：172校）となりました。ここ数年、応募数が減少傾向にあり、その背景や原因について様々な分析を行っています。昨今の教員の「働き方改革」や教員の年齢層のアンバランスによる影響なども考えられ、財団では論文の募集要項や助成方法についても見直しを始めました。2021年度に向けて、教育実践論文の基本的な考え方（主題）は変えないものの、応募しやすく、新しい取り組みへのチャレンジも促すような、論文募集の導入について検討していきます。なお、2020年度の募集に関しては従来通りですが、各地で開催予定の論文説明会等では、前年度の審査会でのコメントを紹介しながら、新機軸へのチャレンジや次年度計画案の充実など質の向上を目指し、現場教員の方々への理解と挑戦をお願いしていく予定です。

(2) 「子ども科学教育研究全国大会」の開催

最優秀賞受賞校の優れた教育実践を発表する全国大会について、2020年度も開催が決定しました。小学校は2020年10月に北九州市立藤松小学校（福岡県）で、中学校は同年11月に豊川市立南部中学校（愛知県）でそれぞれ開催いたします。例年同様、公開授業や協議会、パネル発表などを通じ、全国の小・中学校の教員、ソニー科学教育研究会の会員や教育関係者とともに、理科教育に関わる情報交換や教員同士の交流を図ります。また、各地域から参加希望する情熱ある教員に対し、交通費など実費を負担し参加を促す助成も続けてまいります。さらに、60周年記念イベントの一つとして、前年論文応募し、全国大会参加を希望する学校の中から11名の教員をご招待することになっており、例年にない大会として、「科学が好きな子ども」を育てる取り組みが全国に広がり、活発な活動が展開されることを期待しています。

3. 対外広報活動

昨年トライアル導入した「論文 Web 応募」は好評を得ており、2020年度はさらに応募しやすくなるよう、応募システムを改良いたします。論文応募者の負担を軽減するとともに、Web サイトや SNS でアピールすることで、応募の拡大を後押しできればと期待しています。また、論文主題である「科学する心」や「科学が好きな子どもを育てる」の理解を深めるため、従来の「Web サイト」や「Facebook」の運営、プレスリリースの配信、教育関連新聞や地方紙を中心としたメディアへのタイムリーな情報発信を継続的に行うとともに、教員、保育者が集まる研究会やイベントにチラシを投入するなど、当事者にダイレクト、かつ、リアルタイムな情報発信を進めてまいります。

【公2】 科学教育を中心として豊かな人間性の確立と創造性の育成を目指す児童生徒対象の体験活動事業

この事業は全国の小学5年生から中学2年生までを対象とした「科学の泉－子ども夢教室」と小・中学生を対象とした「ソニーものづくり教室」によって構成されています。それぞれ対象にあわせて、ユニークな活動が展開されており、好評を博しています。

1. 科学の泉－子ども夢教室

「科学の泉」は、『自然に学ぶ』をテーマに、小学校5年生から中学校2年生までの28名の塾生が参加し、白川英樹理事を塾長に、指導員として全国から公募した小・中学校の教員の参加を得て開催している自然体験教室です。2005年度以降、毎年開催しており、今回で16回目となります。例年8月初旬の開催としておりますが、2020年度は、東京オリンピックによる交通等の混乱が予想されるため、時期をずらし、8月16日（日）～21日（金）の5泊6日の日程で行うこととしました。場所は昨年引き続き、新潟県十日町市当間高原にて開催いたします。旧盆シーズンで、応募数の確保が難しくなることも考えられますが、新たに募集用チラシを作成し、全国の科学館など関心

を持ちそうな子どもたちの目に触れる場所に設置し、広く参加を募ってまいります。なお、指導員7名の選考は終わっており、福島、新潟、埼玉、千葉、神奈川、愛知、大阪の教員に担っていただきます。

2. ソニーものづくり教室

ソニーの技術者や SSTA の教員が講師となり、小学校高学年～中学校の児童・生徒を対象に実施する「ものづくり教室」ですが、昨年度はこの活動に強く賛同いただいた篤志家様から多額の寄付をいただきました。2020 年度はその志を受け継ぎ、この事業の拡充をさらに進めてまいります。具体的には、2020 年にプログラミング教育が必修化されることを受け、ソニーグループ会社の協力を得ながら、プログラミング教材（MESH、toio など）を取り入れた財団独自のイベントを企画し、実施いたします。また、2018 年度からスタートさせた理系高校生を対象を広げたイベント「ソニーのエンジニア体験」については、継続して開催できる体制を整えてまいります。

【公3】 科学教育を中心とした教員の質的向上を目指す研究・研修等諸活動を支援する事業

財団の目指す「科学する心」をはぐくみ、「科学が好きな子ども」を育てるには、教育現場を預かる教員・保育者がこの主題をしっかりと理解し、効果ある授業や指導をいかに行っていくが重要になります。財団では教員・保育者の質的向上に寄与する事業にも積極的に支援してまいります。

1. 幼児教育

①「地域自主研究会」の推進

地域において 5 園以上が集い、「科学する心を育てる保育」を目指し、地域に拡げることを目的とする自主的な研究会に対し、活動費を助成しています。すでに活動が継続している大阪府、奈良県に加え、昨年度より北海道、山梨県、長野県、兵庫県、大分県でも発足し、論文応募につながるなど成果も見え始めています。今後はこの「地域自主研究会」の効果に着目し、開催地域を増やしていく支援を強化していきます。2020 年度は、他地域での実践を聞いて問い合わせがある地域や、熱心な保育者がおり、今後の活動が期待される地域（山形県、新潟県、東京都、沖縄県など）への働きかけを行っていきます。また、今春立ち上げ予定の「乳幼児のための科学する心ネットワーク」を活用することで保育者と保育者、園と園をつないで開催拡大を目指していきます。

②「保育者交流」の実施

最優秀園および優秀園 審査委員特別賞の受賞園が開催する発表会や研究会への招待者（保育者）を前年より倍増させ、全国から 30 名程度を公募し、交通費を助成いたします。

主題に迫る優れた保育実践に触れたいとの意欲を持つ保育者に学びの場を提供するとともに、その中から、リーダーになりうる人材を発掘し、拠点の核人材としての育成を進め、自主研究会の開催など地域活動を盛り上げていくことにつなげていきます。

なお、昨年度まで実施していた全国幼児特別研修および他園に学ぶプログラムについては、今年度は東京オリンピック開催による混乱が予想されるため、2020 年度は実施を見送り、2021 年度に向けて、地域拠点リーダー育成研修を主目的としたものに再構築すべく検討してまいります。

2. 子ども科学教育

(1) ソニー科学教育研究会（SSTA）への支援

SSTA は「科学が好きな子どもを育てる」教育を、情熱をもって推進する教員の自主的な集まりであり、全国に 47 支部、2 千名を超える会員を擁しています。SSTA では各支部で行われる独自の研修会に加えて、支部を超えて開催される 3 つの研修会（全国特別研修会、ブロック特別研修会、若手教員研修会）を行っています。財団では、財政面のみならず、企画・運営面においてもこれらの活動を支援していきます。

①SSTA 活性化支援

SSTA の活動状況をみてみますと、昨今の教員を取り巻く環境（高齢化の進行、若手の減少、教員の理科離れ、ワークライフバランスの兼ね合いなど）から、支部活動が活発なところとそうでないところの 2 極化が進んでいるよう

に見受けられます。この課題は SSTA 常任理事会でも重視されており、2020 年度の重点課題として、その対策が議論されています。具体的にはブロック別の担当常任理事が、活動が停滞気味の支部に対して支援することが確認されています。財団としても SSTA 活動のさらなる活性化が財団事業の発展につながるとの考えから、従来の助成の在り方を見直しつつ、より効果的なものとなるよう財政面的だけでなく、人的面も含め、支援していきます。

②SSTA 主催研修会への支援

2020 年度はブロック研修会と若手教員研修会の開催について支援していきます。

ブロック研修会は、各支部で行っている研究の交流と深化を目指して、全国を 4 つに分けたブロックごとに開催され、主に中堅教員が集い、理科・生活科の授業実践を中心に、単元計画や指導案の作成などを行うものです。また、理科教育の中心的な立場で活躍される指導者から最新の情報を享受し、直接指導を受けて学ぶ場としても企画されています。2020 年度は、8 月初旬から中旬にかけて、2 泊 3 日で、東日本ブロックは青森県八戸市で、中日本ブロックは富山県で、西日本ブロックは奈良県で、九州ブロックは沖縄県で開催される予定です。

また、若手教員研修会は教職経験の浅い若手教員を対象に、理科教育の魅力を実感しながら実践的な指導力の向上を図るとともに、SSTA の活動を、より多くの若い教員に認識してもらう良い機会と位置付けています。

本年度は、6 月に 1 泊 2 日で、北海道、神奈川県、新潟県、大阪府、福岡県の 5 カ所で開催する予定です。

なお、昨年までこの二つの研修のほかに、全国特別研修会が東京で実施されていましたが、2020 年度は東京オリンピックの開催時期と重なり、交通機関等の影響も大きいことが予想されるため、実施は見送り、2021 年度開催に向けて研修の目的・コンセプトから内容を見直すことといたしました。

(2) 「授業での活用を重視した理科教育研修コンテンツ」の制作

SSTA の若手教員の育成と支部活動の支援を目的に、「科学する心」を育むうえで大切な、「自然を観る目」と「実験・測定結果から科学の原理・法則を見いだす目」を実体験によって身に付ける機会として、「理科みらい塾」および「理科みらい講座」を 2015 年度より実施してきました。本年度はそこで積み上げたノウハウを活かし、SSTA 主催研修において、「授業での活用できること」、「支部会員が自ら実施できること」に重点を置いた研修コンテンツの制作を行います。また、学習指導要領の改訂により、新たに導入されるプログラミング教育について、MESH による授業実践検討や学校と協力して行った授業づくりなど、導入支援をしてきましたが、2020 年度はそこで得られたノウハウを活用し、もう一步踏み込んだ形で、SSTA 研修や STEAM 教育につながる理科授業、さらには、子どもたちの「ものづくり教室」等でも使えるコンテンツ開発に着手し、理科だけに限らず STEAM 教育的要素を盛り込んだものが提供していきます。

(3) 海外の教育団体との交流活動

海外の優れた教育システムや授業実践を学ぶ機会とするため、2010 年度より、オーストラリアの全国的な理科教員の研究組織である ASTA (Australia Science Teachers Association) との相互訪問を行っています。

2020 年度は東京オリンピック開催による混雑や混乱が予想されるため、夏休みの派遣を中止しますが、SSTA 会員の参加経験のある OB/OG による、オーストラリアで学んだ STEM 教育や多様性教育を、どのように日本の教育に活かしていけるか、議論の場を用意し、これまでの経験を総括する場を設けます。

今後につきましては、海外交流そのものは参加者からの評価も高く、帰国後の教師の活躍も多く報告されているため、今年度の休止期間を利用し、2021 年度に向け、より良い交流の形を検討していきます。

以上